

## 本との出会い

内田 瑛子 (准教授 英語)

私は「本の虫」ではない。子どもの頃も「本の虫」であったとは思えない。いつも本に囲まれて、数冊は同時進行で読んでいるが、仕事関係の本以外は、その時の気分に合わせて読んでいる。子どもの頃、本好きの友人は、図書館を利用して次から次へと本を読んでいた。小学生のときに友人の家に遊びに行き、その家の本棚に児童書の全集がびっしり入っていたのを心からうらやましいと思ったことを今も鮮明に覚えている。本を所有したかったのだと思う。読む本は自分で買って読み、一冊ずつ自分の本棚に本が増えていくことがうれしかった。新渡戸稲造が、図書館の本を全読破すると決意し、実行したということを読んだ時、私はそれほどの知的欲求もなく、また自分に厳しくもないので学究生活には向かない自分を自覚せざるをえなかった。ただ、授業をさぼり、一日気に入った本を読んで、夕日を眺めながら、時間の経過を視覚で捉え、非日常生活の中にいる自分を感じてなんともいえない幸福感を味わっていたように思う。本を読むという作業は、私の精神的健康をどうにか保ってくれる方法であった。現実には、誰もがそうであろうが、自分の思うようなものではなく、その現実に押しつぶされそうな時、現実逃避として私は本に助けを求めた。自分の心の葛藤をもてあまして、他人に言うこともプライドが許さず、どこかに心の平穩をつかめる方法が書いてあるかもしれないと期待をこめて読んでいた。実際にはその方法は自分で工夫し、自分で立ち上がるという決意をし、行動に移すしかないのだが、それでも、著者の多くが私と同様に、心に傷をもちそれと格闘していることを知ったことはおおいなる慰めとなった。

どの本と、どのように出合ったか。それぞれの時にそれぞれの思いに添えてくれた本があったと思うが、この一冊というのを選ぶのは難しい。最

初の記憶にある本は『こねこのピッチ』である。幼心にも心を揺さぶられ、絵とともに長く心にとどまっている。小学生時代、中学生時代、高校生時代と当時はそれぞれの時代に「読むべき本」というような雑誌の付録があり、そのリストを消しこみながら読んでいった。それらの推薦図書が多分的確であったのだろうと思うのは、あまり読後がっかりした記憶がないからである。そして自分の精神年齢に合った本と出会えたことが幸せであったと思う。

今でも未読の本を手にとると心が躍る。子供の時に新学期に新しい教科書を手にしてわくわくしたあの想いと似ている。現在は情報過多の時代であるので、本を選ぶのにも却って苦労することもあるのではないかと思う。私はネットで本を購入することが多いが失敗することも結構ある。本にも相性というものがどうもあるらしく、読みやすい本と評価の高い本でも私には読みにくい本もある。たぶんそれは私個人の知的修練不足かもしれないが、それでも人生の時間を考えると、読み始めてつまらないと思う本は途中で止めることを善しとしている。忍耐力強化であれば、読了することも訓練になるかもしれないが、必要に迫られていないのであれば、心が少しも躍らない本を読み続けるのは時間の無駄であるといいたい。

以前、恩師に英文学をなぜ専攻したのか伺ったことがあるが、日本語の本であると読むものが無くなりそうであるが、英語の本であれば読む本が無くなることはないだろうと思ったから、という答えをいただいた。そんなふうには言い切れる読書をしたいとつくづく思ったものである。

それゆえ、私は「本の虫」ではないが、「本の虫」になることにひそかに憧れている。

